

責任者、出て来い！  
怒りのスクープ告発【前編】

「M7」以上でメルトダウンは  
島根原発「地下活断層」を黙殺したのは誰だ？」

（『週刊プレイボーイ』二〇〇六年一月六日号）

2006年6月、中国電力の島根原発で、原発の近くを走る活断層を電力会社が見逃していた事実が判明。おまけに、国の「ダブルチェック」審査も機能せず、活断層の長さを過小評価したまま原発建設にゴーサインを出していた。果たして、そんな原発は「想定外」の大地震に耐えられるのか？ それ以前に、国はちゃんと「安全審査」をしているのか？？ ていうか、島根以外の原発だってヤバいんじゃないの？？？

となれば、「責任者を捜す会」の出番である。

ルポライター・明石昇二郎&

「責任者を捜す会」

切り捨てられた  
「パブリックコメント」

今から5年前の2001年3月、筆者は『サンデー毎日』誌上で4週にわたり「シミュレーション・ノンフィクション 原発震災」と題した連載記事を書いたことがあった。内容は、近く発生が予想される東海大地震を起因として、中部電力・浜岡原発で事故が発生した場合、我らが祖国・日本にどんな被害がもたらされるのかをシミュレートしたものだ。

その結果、被災地は見捨てられ、1200万都市・東京は無人の都市と化し、日本人の20人にひとりが被曝<sup>ひばく</sup>死するという地獄絵図が浮かび上がったのだ。記事には大変な反響があった。電力

会社からは再三、抗議が寄せられ、原発推進陣営の学者たちは感情むき出しの非難を轟々<sup>ごうごう</sup>と繰り返す。

だが、我々の問題提起を否定することはついにできなかった。それどころか、連載終了から3か月後の同年6月、国の原子力安全委員会は原発の耐震設計審査指針（耐震指針）の見直しに乗り出したのである。

それから5年。今年（2006年）9月に原子力安全委員会は、原発の耐震指針を全面的に改めた。耐震指針が見直されたのは実に28年ぶりのことだ。

とはいえ、気になることもあった。「検討分科会」委員として改定作業に関わっていた神戸大学の石橋克彦教授が、新指針がまとまる直前の今年8月末、委員を辞任していたからだ。その際、石橋教授は報道陣に対し、こんなコメントを出していた。

「原子力における活断層研究は異常。非常に特殊な、ごく一部の人が牛耳<sup>ぎゅうりゅう</sup>っている」

ますます気になる。そこで石橋教授を取材してみたところ……

「本当に異常なんです。電力側と審査側の双方に、同じ少数の『専門家』が深く関わっているという、信じがたいことがまかり通っている。しかも審査には、第一線にいる活断層の研究者はほとんど入っていないのです」

\*

耐震指針の改定案に対する関心は高く、国民からは700件もの意見（パブリックコメント）が寄せられていた。だが、分科会はずかに語句の表現を修正しただけで強引に結論を取りまてていたのだ。石橋教授は「これでは国民への背信行為になる」として、委員を辞めたのだ。

となると問題は、この28年ぶりに改められた新指針が日本を破滅から救

う「救世主」的存在なのか、それとも国民に対しお茶を濁しただけのものなのか——ということになる。

延びゆく

「活断層」？

「活断層」とは、最近の地質時代に繰り返し活動し、将来も動く可能性のある断層のことだ。直下地震（直下型地震）ともいう）の震源となり、長ければ長いほど、引き起こされる地震の規模は大きくなる。専門家によると、10キロの長さの活断層が引き起こす直下地震の規模は「マグニチュード（M）6・5」程度、20キロだと「M7・0」程度ということになるらしい。マグニチュードの値がわずか0・5しか違わなくても、地震エネルギーは5倍以上も違う。

ところで、現在2基の原発が稼働する中国電力・島根原発の直近には、1、2号機の建設当時、原発の耐震性に影響を与えるような活断層は「ない」とされていた。

が、98年になって中国電力は突如、活断層が「8キロ」あったと公表。さらに、6年後の04年には「10キロ」と訂正される。まるで、もともとなかったところに**活断層がじわじわと成長していったか**のようだが、そうではない。単に発見できなかっただけのことであり、中国電力の活断層調査の力のほどが窺える話でもある。

しかし、国はあくまで中国電力に優しかった。同原発3号機の増設に伴う安全審査で、国はこの「10キロ」という中国電力の調査結果を受け入れ、昨年（2005年）4月、3号機の建設にお墨付きを与えていた。

問題はここからである。今年（2006年）6月、中国電力が「活断層はない」と断定していた場所を広島工業

大学の中田高教授<sup>たかし</sup>たちが調査をしたところ、実に見事な活断層が発掘されたのだ（筆者注）。

【注】

中国電力が「活断層はない」と断定していた場所で新たに発掘された活断層では、断層が地表近くにまで達し、奈良時代の土器片を含む地層をずらしている。このことから、この断層が880年に発生した「出雲地震」の震源である可能性も指摘されている。

しかもこの活断層は、約2万8000年前から現在までに最低でも4回、地震を引き起こしていることも判明した。この最新の科学的知見により、活断層の長さは再び訂正を余儀なくされる。その長さはなんと「約100キロ」。ついに活断層は倍以上の長さへと「成長」したわけである。そればかりか、今後の調査によっては**さらに長さが延びる可能性もある**のだという。

この結果、中国電力はまたしても活断層調査能力の欠如を暴露され、国の安全審査もチェック機関としての役目を果たせず、**ザル審査**だったことが期せずして明らかになった。それでも中国電力は今、マスコミの取材に対して、「計算では（活断層の）長さが20キロでも原発は大丈夫」などと答えている。

だが、今の勢いだと、活断層はさらに延びて、20キロをゆうに突破しそうでもある。

調査も審査も「甘かった」？

国と中国電力の主張する活断層の長さに「異議あり」として、新たに活断層を掘り当てた広島工大・中田教授はこう語る。

「川は基本的に真っすぐ流れるもので

すが、この地域を流れる川はほとんど同じ方向に曲がっている（図は省略）。つまり、断層の運動によって横にずらされていくんですね。

M7ぐらいの地震では、1回に最大で2メートルぐらいしかずれないんですが、中には150メートルから200メートルぐらいずれている川もある。この地形は、断層が同じところで何度も繰り返して動き、大きな地震を引き起こし続けてきたことの『証拠』なんですね。ということは、この断層は将来もまた、大きな地震を起こす可能性がある」

航空写真を使い、地形の変化から活断層の位置を読み取る中田教授たちの手法を「変動地形学的調査」という。ところで中田先生、島根原発は大丈夫なんでしょうか？

「私は原発反対の立場ではありません。しかし、耐震性がないものを作っているわけではない。中国電力は、最新の活断層研究の成果を軽視して活断層を探しているんです。断層から外れたところを掘って『ここは活断層ではない』などと主張し、活断層を短く評価しました。中国電力にとっても、最初から活断層を正しく把握できていれば何の問題もなかったのではないかと思うのです」

——まったくその通りです。  
「原子力の世界で、科学的とは言えない方法で活断層を調べていると知ったのは、つい最近のことです。原発の活断層調査や国の安全審査に関わっている『専門家』の人たちの能力についてはよく知りません。でも、結局活断層を見つけられないのだから、彼らの力量は推して知るべしでしょう。」

さらに問題なのは、そんな『専門家』の中に、国の安全審査に関わっていないが、電力会社の活断層調査の指導をしている人がいるのではないか、という疑いがあることです」

\*

それが事実かどうか、さっそく調べたところ、この条件に該当する「専門家」氏は2名存在した。そのうちのひとり、東京工業大学教授の衣笠善博先生は、中国電力が国への許可申請前に実施した活断層調査の「技術指導」を行なう一方で、国の原子力安全・保安院（2001年1月5日以前は通産省）が島根3号機の安全審査をした際、「委員」や「原子力発電技術顧問」として審査に深く関わっていた。つまり、「受験生（中国電力）に間違った答えを教えた入試問題作成委員の先生（衣笠先生）が、受験生の不正解の答案に満点を与えて合格（原子力安全・保安院の安全審査）させてしまった」

という構図なのである。その衣笠先生は、かく宣う。

「僕は専門家ですからね、『雪は白い』というのを、中国電力から聞かれようと、保安院から聞かれようと、安全委員会から聞かれようと、白いものは白いと言う。これだけのことじゃないですか。それが何か問題ある？」

——失礼な言い方になってしまつて恐縮なんです。島根では結局、活断層を10キロも見逃してしまつて……

「見逃したんじゃない！」

——見逃したわけじゃないんですか？  
「はい。後で新しい事実が見つかったということであつて、見逃そうと思つて見逃したわけではないんです」

——では、何と言えど？ 判断は誤りであつた、とか？

「甘かつたという言い方がいいと思いませんね」

——今回のもめごとの根源は、電力会社の活断層調査能力の欠如にある、ということなんでしょうか？

「まあ……そうは……」

——そうではないんですか？

「そういうことが起きないように、指針が改訂されたわけです」

＊ 島根の活断層の長さがまだ「8キロ」だった頃の1998年10月に開かれた「島根県原子力発電調査委員会」の議事録を見ると、その中で衣笠先生は国の「技術顧問」という立場でこんな話をしている。

「私も専門的に判断するときには（中略）いろんな種類、いろんな年代に写された空中（＝航空）写真を何回も何回も見て判断をしておるといふことだけおわかりいただきたいと思います」

「指針そのものは20年も経って（中略）古いものだという印象を与えてるようでありますが、今のところ特に問題があるという認識はしておりません」

「2キロは評価をしなきゃいけないけども、8キロまで評価する必要があるとは思ってません」

衣笠先生はそう話したことなどすっかり忘れ、活断層を見逃した責任には頬かむりをしたあげく、すべては**古い耐震指針が悪いのだ**、と言わんばかりである。

そんな衣笠先生は、耐震指針の改定作業に分科会委員として関わっていたひとりである。議事録を覗くと衣笠先生は、島根の事例を重大に受け止めるべきだ、との意見が出ても、

「分科会で一度は合意した議論を蒸し返すもので、到底受け入れられない」と、強引に議論を打ち切って結論を取りまとめることに多大なる貢献をしていた。ここまでの取材ですでに、新指針は「**お茶を濁しただけのもの**」である可能性がかなり高まってしまった——と思う。

中田教授をはじめとする第一線の活断層研究者たちが、島根半島を東西に横切る活断層の長さが20キロを上回

っているのはほぼ確実と見ている中、その活断層が派手に動いてM7クラス  
の地震を引き起こした時、耐震設計を  
上回る地震動に襲われた島根原発は制  
御不能に陥り、最悪の場合は事故故に  
至る——と考えるのは、決して空想次  
元の話ではあるまい。

そして、取材を続けていくうちにこの「**原発耐震性**」問題は、実は島根だけに限った話ではないことが明らかになっていくのである。（続く）

配信元・ルポルタージュ研究所

Copyright (C) 明石昇一郎

URL: <http://www.rupoken.jp/>